

滄水会ニュース

第 9 号

平成 7 年 1 月 1 日

滄水会

職業能力開発大学校

〒229 神奈川県相模原市橋本台4-1-1

パワフルな滄水会を

～ 1 年間の活動報告 ～

1993年10月30日、滄水会総会において私を会長とした新しい役員が選出されました。民間企業からの会長は初めてということでしたが、新役員の中には経験者もあり、合わせて多くのOBの協力も得られ、どうにか任期の3分の1である1年が経過しました。

事業団そのものの組織、そこで働くOBの立場、同窓会としての仕事等々、卒業後ずっと民間で過ごしてきた私にとっては戸惑うことが多く、手助けを受けながらここまで来たというのが実感です。

ここで、1年間の経過報告をしておきます。

[1993年10月30日] 滄水会総会で新役員選出。

[11月11日] 第1回役員会。各役員の出発点と今後の予定の打ち合わせ。

[12月9日] 第2回役員会。①同窓会名簿業務の専門業者（関西廣濟堂）への代行について、②入学時の終身会費納入の審議、③未納者・新入生への会費徴収文書の検討、④事務処理のため

のアルバイト雇い上げ、⑤同窓会室の移転について、⑥会長の卒業式・入学式への出席（来賓）について、など。

[1994年2月12日] 第3回役員会。名簿業務の代行を行う業者との契約について。

[10月14日] 第4回役員会。①名簿業務代行業者との各種事務手続き、②名簿に所属・役職の項の追加、③会費未納者の取り扱い。

以上が役員会の開催と協議内容です。次にその他の活動を報告します。

[1994年3月20日] 同窓会レター発行。

[3月25日] 会長、卒業式に来賓として出席。

[4月1日] 同窓会室移転。外線（FAX兼）使用可能に。

[4月4日] 会長、入学式に来賓として出席。

[9月26日] 三役、早川宗八郎校長との懇談会。

[10月14日] 会長、能開大名誉教授の懇談会へ出席。

[11月8日] 三役、雇用促進事業団清水理事長に表敬訪問。

会長 尾身 嘉一

私にとって、滄水会は心のよりどころのように思います。一期生として東京・小平の校舎で学んだ青春を、まざまざとまるで昨日のこのように想い起こせますし、4年間共に同じ釜の飯を喰った仲間は、その後の道がどんなに違おうとも顔を合わせれば一瞬のうちに打ちとけ合うことができます。滄水会のメンバーは、そうした仲間の結び付きで構成されているのです。何もものにも代え難い組織の中に我々は身を置いていると自覚したいものです。

そこで、必要なのは単なる組織でなく、利用価値の高い組織です。現世の利益があつてこそ組織は発展し拡大します。個々の仕事、あるいは生活に潤いをもたらす組織づくりこそが、今最も求められているのです。

パワフルな滄水会。こんなイメージを頭に描きながら活動してきた結果が、上記に報告した内容です。

ベストよりベター。より一步でもパワフルな滄水会づくりができるように、関係各位に働きかけ、理解を得ることからのスタートです。もちろん目標までの道程はまだまだですが、歯車

は回り始めました。

特に報告しておきたいのが、早川校長のお取り計らいで事業団の理事長にお会いする機会を得たことです。三役と校長それに矢田貝担当理事を交え、清水理事長と1時間弱、事業団本部(東京、麴町)の理事長室でお話することができました。

これまでこうした機会がなかっただけに、同窓会の活動そのものへのご理解を戴き、温かい目で見守ってもらえるという理事長の態度に、我々一行は意を強くして帰途についた次第です。

また、こうしてお骨折りをして戴いている早川校長とも懇談会を持つことができました。たいへん気さくでいながら、幅広い趣味をお持ちで、多くの事柄に精通しておられることに、我々一同は親しみの中に新しい指導者像を見る思いがしました。

残りの期間2年ありますが、パワフルな滄水会づくりへ向けての皆さんのアドバイスをお願いして報告を終わりたいと思います。

(1965年(第1回)卒、木材加工科 建築専攻)

滄水会創立30周年記念事業

～寄付のお願い～

滄水会会員の皆様には、益々ご活躍のこととお喜び申し上げます。

今年は、滄水会が創立して30年の節目の年にあたります。滄水会創立の年に産声をあげた赤ん坊も三十路の活きの良い年代に差しかかる、—そんな歳月30年は長くもあり短くもあり、感慨深いものです。親子の会員も何組か誕生しました。

さて、理事会では30年というマイルストーン通過の証として、下記二つの記念事業を企画いたしました。つきましては、盛大な事業にしたいと存じますので、会員諸兄に寄付を賜りたくご案内申し上げます。

①記念誌の発行 記念寄稿文集および会員名簿の二部構成から成る記念誌を発行する。

なお、記念誌は、有料化を図った定期刊行誌(会員名簿)と

同様、有料を原則としますが、寄付を戴いた会員には無料で贈呈するとともに、寄付者氏名を「広告」として掲載させていただきます。

②母校学生自治会への記念品寄贈 30周年の記念を永く留める物品として、「天幕」を学生自治会へ寄贈する。昨秋の学園祭を訪ねたところ、屋外での催しのために張っているテントは大学が保有するものでは到底間に合わず、学生たちは近くの小・中学校から多数借用しておりました。こうした借用を少しでも減らすべく、寄付財源の許す限り多数のテントを学生自治会へ寄贈したく企画しました。

寄付金 一口5,000円(何口でも結構です)

寄付金振込方法 同封の4連式振替用紙(宛名兼用)をご利用の上、最寄の郵便局からお振り込み下さい

滄水会名簿の改訂と会費未納者の取り扱いについて

さて、先のご案内(『滄水会創立30周年記念事業』について)のとおり、記念事業の一環として「記念誌」を発行すると共に、名簿の改訂を計画しております。そこで、名簿改訂に向

けて会員の皆様の住所等を改めて確認させていただくことになりました。新たな会員名簿では、従来記載しておりました「氏名、自宅住所・電話、勤務先名、勤務先所在地・電話」に加え

て、「勤務先の部署名・役職名」を記載することに致しました。
 会員の皆様のご活躍の様子が少しでも伝わればと思いますので、

何卒、正確なご連絡をよろしくお願い致します。

事務局あて連絡用にFAXを設置

滄水会事務局の移転に伴い、新たに専用電話（FAX兼用）を設置いたしました。会員の住所変更等のご連絡は随時お受け致しますが、事務局には専任事務員等が居りませんので、FAXをご利用くださいますようお願い致します。

FAX(兼電話)番号 0427-63-9267

住所変更等の際には下記の内容を記載の上、FAXあるいは郵送して下さい。

－ 住所変更連絡票 －

ふりがな				科 名	卒業年度	卒業期
氏 名	姓	旧姓	名		19 年	期
	()					
勤務先	名称		所 属	役 職		
	所在地	〒		TEL.		
自宅	〒			TEL.		

次に、会費未納者の取り扱いについてご案内致します。会費未納者の人数は、なんと300余名に及んでいます。なかには、卒業後30年あまりの間、未納のままの方々が何人かおられます。会費未納の方には、滄水会ニュース発送の際には必ず『会費納入のお願い』と振込用紙を同封してまいりました（今回も同封しております）。新たに会員になられる方々の手前もあります。未納のままの方々は、至急納入されるよう重ねてお願い致します。1994年12月現在の会費未納者一覧表を別紙に示してあります。

滄水会の「会員」とは、能開大の卒業生であって会費を納めた者です。会費を納めなければ会員にはなれません。滄水会名簿は、会員名簿ですから、会員でない者は掲載されません。そ

こで、会費未納者については残念ですが、次回の名簿から、氏名以外の項目をすべて掲載しないことに致しました。具体的には下記の例のようになります。次回以降の名簿では、このような表記がなされている方は、能開大の卒業生であっても、滄水会の会員ではないことを意味します。

会費未納者一覧表は、十分に注意を払ったつもりですが、事務上の手違いにより誤りがあった場合は御容赦下さい（事務局まで連絡して下さい）。未納者の中には住所不明者が多数居ります。会員の皆様方には誠に申し訳ありませんが、未納者一覧表の中にお知り合いの方がいらっしゃいましたら、会費（10,000円）を納入していただけるよう呼び掛けをお願い致します。

〈記載例〉 会費未納者（非会員）の場合

氏 名	〒 自宅住所	自宅☎	勤務先	所属	役職	勤務先所在地	勤務先☎
滄水 太郎	*****						

(注) 能開大卒業生であるので氏名だけは記すが、自宅住所欄を*印とし、他欄を空白とする。

会費未納者振り込先

口座番号：00150-3-45350 会費：10,000円

住 所：〒229 相模原市橋本台4-1-1 滄水会

『シニア会』の必要性

富崎特許事務所所長（弁理士） 富崎 元成



職業能力開発大学の卒業生も、今年の春で4千名を超え、一期生は50代のなかばに差し掛かろうとしています。多くの卒業生は社会的にも重要なポストを担い、最前線で活躍されていることでしょう。

そこで、この紙面を借りて提案があります。滄水会全体の組織を強化することも重要とは思いますが、もう少しまとを絞り、事業団の施設長、大学の教授、自営業の経営者、会社重役など横の繋がりが要求される人達を組織し、互いに助け合う会があっても良いかと思うのですが、世界的な能開大の広がりを見ると、他の大学の同窓会にない効率の良い活動ができるものと考えます。

私ごとで恐縮ですが、特許事務所を経営している関係で、大企業の管理者から中小企業の経営者、また大学の先生まで、主に研究開発に関して種々の付き合いがあります。この経験を通して言えることは、革新的な新技術（研究も含む）、新製品等のイノベーションは、交際の狭い孤高の技術者、研究者または経営者から発生しないということです。

取り分け、個人的な人と人との関係、すなわち日常の仕事、専門等と直接関係のない個人的なヒューマンネットワークを構

築している人ほど革新的な新技術・新製品を生み出しているという事実に注目する必要があります。このことは各種機関の調査でも裏付けされています。我々の母校の卒業生は伝統が浅いこともあって、こうしたプライベートな関係が希薄であることは否定できません。もちろん、卒業生の中には世界中を席卷する製品を作って活躍しているオーナー社長もおられますが、このような人が一人でも多く輩出するようにお互いに切磋琢磨する経営者（リーダー）会的なものがあっても良いのではないかと思います。

同窓会は互いの専門や利害を離れて触れ合いが出来る組織です。この中から一人でも更に活躍する人材が出てくれば、滄水会の発展にも寄与でき、ひいては母校の発展につながるものと思うのですが。

日本の社長の中で某マンモス大学の卒業生が一番多いと言われてはいますが、これは人数が多いこともありますが、意図的に管理者・経営者にさせるべく学校・OBが新人を発掘して育てているとも聞いています。我々滄水会もその時期にきているとも思うのですが。

(1971年(第7回)卒、機械科)

最近の能開大生就職状況

職業能力開発大学校 学生部学生課 課長 中川 望



本校も創立以来33年が経過し、卒業された方々も平成5年度には、4,004名を数えるまでに至っております。卒業後の皆さん方の活躍ぶりが、本校にも聞こえてきて大変頼もしい感じがしております。職場における役職も所長や校長または社長といった方々が沢山おられて、我々が学生に対する就職ガイダンスを行う中でも、先輩諸氏の活躍ぶりを紹介して励みとさせています。

今日までの卒業生の進路は、ほぼ半数が職業訓練指導員となっており、他の方々は民間企業へと就職しています。ご承知の

ように本校は目的校でありますから、当然指導員となるべきでしょうが、中には本校の性格を十分に理解していない学生もいます。可能な限り多くの人に指導員になって貰うために、4年間をとおして企業内職業訓練の現場見学や、特別セミナーなど実施して学生の指導員への関心を高める努力が払われてきました。学生課としても就職ガイダンスなどで就職指導を行っていますが、それらの努力もあって指導員希望者が増えてきています。従って指導員の採用希望には概ね応えられるようになってまいりましたが、昨年あたりから、この就職状況にも変化が現れ

てきました。不況によって公務員志向が高まり、指導員の希望者が採用予定人員を越えて、採用されない者が出てきたことです。指導員への就職を第一に考え、団あるいは都道府県の採用に向け努力を続けることは変わらないにしても、民間企業への就職活動をもっと進めていく必要があります。全員が指導員に出来ない現状においては、民間企業の中で能開大卒としての能力を発揮させなければなりません。今までは、本校の方針として民間企業への就職は積極的に勧めていませんでしたが、現実には半数の卒業生が民間企業へ就職をしていることや、その活躍ぶりなど、今後、民間企業に対する就職活動をも真剣に考える必要があります。卒業生の皆さん方の中にも相当の地位の方々がいらっしゃいますし、何よりも本校の卒業生の実力をいちば

ん理解して頂いていますので、採用や紹介などは非ご協力も頂かなければなりません。一方で、技術革新や産業構造の転換などを背景に大学に求められるものも変化してきており、それに沿った改革や再編が実施されております。本校も例外ではなく、大学校の再編も元年度に実施され、時代のニーズに即したものと整備が図られましたが、平成7年度募集についても「系」で募集するなど新たな再編を進めようとしております。時代のニーズに即した有能な人材を育て、優秀な指導員としてまた技術者として先輩の後に続くように大学当局も引き続き努力を致しますが、滄水会会員諸兄のご協力と励ましが大いに必要とされます。宜しくお願い申し上げます。

(1966年(第2回)卒、塗装科)

地域に根ざした能開大生の発展に向けて

～支部活動：熊本県支部から～

熊本職業能力開発促進センター、開発援助課長 坂本 功

県庁職業能力開発課の佐藤氏（電気科10期）と一杯飲みながら飲談していたら「同窓会」の話題になり、「熊本県でも数年前に1回やった記憶があるが最近はやってないね。随分、人数も増えていることだろうし、近いうちに同窓会をやらないか」と話があり、お互いに仕事のときはなかなか意見の一致に時間がかかるが、酒も入っていることもあってトントン拍子に話がまとまり、まずは名簿を作ろうということになった。

能開大および先輩諸氏に情報を集めてもらい名簿作りに奔走したわけであるが、卒業して30年近くも経つといかに情報不足が感じられた。県職員または事業団という組織の中で暮らしている者にとっては常に連絡はあるが、民間、個人企業の人にとっては能開大生としての情報は少なかったであろう。熊本



(中央が坂本)



県全体で50人の卒業生が居て、改めてビックリしたことである。ポリテクセンターの職員にとって、いかに「井の中の蛙」で事業団だけで生活していたことが。

時、あたかも「事業主団体方式」の嵐の中で、事業団がいかに民間団体の在職者に対し、相談援助業務を実施し、生涯能力開発体系の作成等に寄与できるかというときに、同窓生にその趣旨を話し、会社の中でその理解を深めてもらうことができるなら、たいへん効果的であるし、有り難いことである。

県にとっても熊本県全体の能力開発業務の推進に少しでも寄与できるなら、そういう集まりはやるべきである。とまあ、こんな具合に飲む口実を考えてはみたが、実際はワアワア言って飲みただけである。

飲みたい2人が急に思いついて計画したため、今回は50人全

員の集まりにはならなかったが、3期生から30期生まで25人、入丁度半分の人数が集まり学生時代の思い出から現在の仕事のこと、いろんな話題で充実した時間を過ごした。飲みながら急に写真機を買ってこい、記念に写真を撮ろうと言い出したり、日頃所長には言えないことを酒を借りて喋った

りと「無礼講」模様となり、二次会、三次会と夜の更けるのも忘れて飲み歩いた。

「日付も変わったことだし、また集まろう」と、後ろ髪を引かれる思いで散会したのであった。

(1968年(第4回)卒、鑄造科)

支部誕生！

～支部活動：岩手県支部から～

岩手県商工労働部労政能力開発課 技術副主幹兼指導係長 奥友 国夫



滄水会岩手支部の設立総会を平成6年2月26日に盛岡市の「こずかた会館」で開催することができた。これも一重に水谷宏氏（現在、(財)雇用振興協会に調査役として勤務）の大変なご尽力によるものであり、心から感謝を申し上げたい。

ところで、彼が平成4年4月北海道の函館職業能力開発促進センターから岩手雇用促進センターに赴任されてまもなく、たまたま県が主催する公共職業能力開発等施設長会議の場で再会することができた。この会議には岩手職業能力開発促進センターの橋本課長も出席しており、彼らとは同期であったので卒業以来の再会は感激の至りであった。

この日以来、彼らの岩手任期間中は仕事の上で大変お世話になった。この紙面をお借りして彼らに対し、改めて感謝を申し上げたい。

前置きが長くなってしまったが、実はこのような経緯の中で水谷君の積極的な働きかけとともに自ら準備された結果、滄水会岩手支部の設立を実現することができた。

さて、平成5年度調べによると、岩手県に在住している卒業生は、雇用促進事業団が9人、県職が8人、民間が2人、その他が2人と、第一期から第二十九期まで21人となっている。このうち、設立総会には12名が出席し、次のとおりの申し合わせを行ったところである。

1. 会長には菅原孝雄（1期生）、監事には水谷宏（5期生）及び奥友国夫（5期生）が出席者の総意でそれぞれ就任した。
2. 会則の素案が検討され、方向づけが行われた。

- (1) 会の目的は、岩手県に在住している卒業生の親睦を図ることである。
- (2) 会の名称については、次回総会で決定する。
- (3) 参加者の範囲は関係者であれば限定しない。
- (4) 当面、会の組織運営は会長と監事が相談しながら進めることとする。
- (5) 定例会合は2月頃に設定し、このほか必要に応じて臨時会合を設ける。
- (6) 会の活動の範囲は、今後の状況によって決める。
- (7) 会費は特に徴収しない。会合の開催のつど開催に係る費用を参加者の均等払いとし、次回への繰り越しは行わない。

(1969年(第5回)卒、第一電気科)

会員の皆様へのサービスとして、名簿の都道府県別、年別、期別の出力が可能です（実費必要）。御利用下さい。ただし、名簿の出力は会長の許可が必要です。詳細については事務局まで連絡下さい。



***** § 会員近況報告 § *****

指導員養成という母校の使命のために、職業能力開発分野で多数の卒業生が活躍していることは当然ですが、職業能力開発以外の分野で活躍中の卒業生もまた多数いることも事実です。これまで滄水会ニュースでは組織的な連絡の取り易さもあって、職業能力開発分野に関する話題に偏り勝ちであったことは否めません。そこで、今号では職業能力開発分野を除く各界で活躍中のOB諸氏の近況報告を特集しました。

お茶づくりに就いて

(有)大塚製茶代表取締役 大塚(旧姓、萩原) 聡



訓大を卒業して早くも25年の歳月が流れました。県訓へ就職した後に茶農家に養子に入り、職業訓練で人を育てる仕事から同じ生き物でも茶樹という植物を育てる仕事に進みました。緑茶という製品をつくるプロセスは、茶畑をしっかりと管理してより良い生葉(茶の木から刈り取った原料となる葉っぱ)を育てる農業の分野とその生葉を製茶工場に於いて機械を使用して乾燥させる製造分野との二つに分けられます。この両方が最適に行われないと旨い茶(嗜好品のため何を基準に決めるのか難しい)は作れません。一つ目の分野は植物の状態を注意深く観察して、茶の木の生理を手助けするための管理をしてやれば良いわけですが、これを乱すものとして気象の変化があります。経験とデータの積み重ねによる判断で答えを出していくしかありませんが、最近の気象は異常の連続で判断が難しく、管理が後手に回ってしまいます。「気温が高い」、「雨が少ない」——このような情報に日々の農作業が振り回される毎日です。二つ目の分野は、生葉の持っている水分を乾燥させながら(原材料の重量の4分の1が製品になり4分の3は水分)生葉を十分に揉み込んで、お茶を煎じたときに旨みの成分が浸出しやすいように加工する分野です。この工程は昔の手作業の動きを機械の動きに置き換えたもので、機械は明治・大正の頃に開発され今日まで多数の改良が加えられています。その原理は殆ど変わっていません。生葉を揉み込む力の強さ、乾燥させるための熱風

の温度・風量、これらをうまく制御することによって生葉の持つ旨みの成分が最高に引き出されたお茶に加工することができます。作業者は、恒率乾燥理論の計算式により諸条件を機械の制御盤にセットして加工を始めますが、設定条件の正しさをリアルタイムに判断してくれるようなセンサーはまだ完成されていないので、常時五感を働かせながら条件設定を修正しなくてはなりません。とは言え、製茶機械の分野も省力化・高能率化のために自動制御や大型化の技術開発が進んでいます。五感の感度を磨くことと新しい技術を吸収し応用していくこと、一見両立の難しい二つの面での努力が工場経営の安定にとっては必要です。緑茶には規格がなく、また良品か不良品かを測る器具もないために、売買のときの値段の幅が広く、高く売れば利益も多いが安いときには持ち出しになってしまう厳しい一面があるからです。

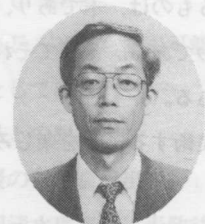
お茶の製造技術も常に進歩しています。しかも原理が大きく変わらない限り加工工程中判断する技能はより高度なものが必要になると思います。最近では、茶農家の後継者の農家研修の受け入れ先として、若い人と茶の将来を語り合う機会が多くなりました。我が家の後継者づくりも近々始めなければならないという年代に入りました。訓大で学んだ事が、道は変わっても大きな心の支えになっているとつくづく感ずる今日此の頃です。

(1969年(第5回)卒、板金溶接科)

最近の仕事

旭光学工業(株)カメラ事業部第一開発設計部部長

川崎 雅博



旭光学は、古い人なら「PENTAX、PENTAX、望遠だよ、望遠だよ、ワイドだよ」のコマーシャルでお馴染みのカメラ会社です。最近では「LIGHT & IMAGE」をテーマに医用機器、情報通新機器、眼鏡レンズ、測量器等に多角化の展開を図っております。しかしまだ、カメラ関係の比重が60%と高いのが現状であり、今後非カメラ部門を伸ばすことが会社発展の一つの課題となっております。カメラ部門においては、1986年、他社に先駆けて「ズーム70」を発売して以来、「ズーム105」、「ズーム115」等のヒット商品を発売し、ヨーロピアン・コンパクトカメラ・オブ・ザ・イヤー等数々の受賞に輝き、現在でも国内のレンズ・シャッター部門ではトップシェアを保っています。

私は、旭光学に入社して以来、カメラの電子回路設計を行ってきました。カメラ設計では初めての電気屋であったために何でも自分でやる必要があつて、苦勞した反面、非常にやりがいのある職場でもありました。IC等の設計も数多く手がけ、某ICメーカーから「旭さんの回路は神様です」と言ってもらったときは、それまでの苦勞が報われた気がしました。

現在では、設計部員も増え、また年齢的にも平均30歳と働き盛りの人員構成のため、私も実務から遠ざかっているのが現状

ですが、元々自分自身管理職というより技術屋指向が強いので、また新しいことをやろうと計画中です。さて、わが社も「円高対策&コストダウン」で香港・中国・台湾・フィリッピンへと生産が海外にシフトしております。わが部においても2年間フィリッピンの大卒者数名を日本で教育し、今年の始め私も2カ月間フィリッピンに行き、彼らの生産技術部の立ち上げに協力してきました。彼らは非常に優秀かつ勤勉であり、将来のアジアの時代を予感させるものがあります。

今思えば、技術面では実習・授業等、精神面においては空手を通じて「基本・プロセスを重視する」と言うことが訓大時代に学んだことのひとつです。「結果良ければ全て良し」の傾向になりがちですが、再度このことを徹底したいと考えています。

最近の厳しい経済情勢下、わが社においてもリストラ継続中の状態がありますが、今後はユーザー・ニーズにあった独自商品をいかに早く開発できるかということが生存のKEYとなつて来ており、今一番頭を悩ませているところであり、また頑張ろうとしているところです。

最後に、能開大卒業生皆様のご活躍を心より祈念致します。

(1971年(第7回)卒、第二電気科)

そのうちにみえしもの

埼玉大学教育学部美術教育講座、助教授 横尾 哲生

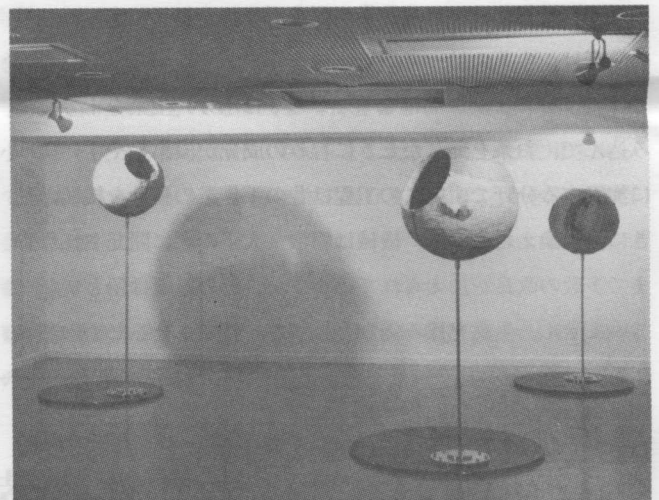
自らを取り巻く天象のなか、そして自らのなか、その深層に在りしものを掴みたく、掴む試みの内に掻いている。

時の記憶は深遠にして、創造の可能性は無限に広がる。

対象とする素材である木、そして自分自身に目を向けるとき、それぞれの内に秘めしその生成・消滅を意識し、その繰り返される連続性への認識を深めることとなっている。その地その地の氣候風土のもとそれぞれの特性を引き継ぎ多様な様相を示す木々に、この地の磁場的美意識に裏打ちされた今の私自身の知と力を注ぐ。その関わり方を通し、ある種の均衡が生まれ形成されるものは、木であり、私であり全ての事象・現象を象徴するものである。そしてそれは、知ることではなく解るということである。

今、美術することを楽しみ、その楽しみを伝える立場に立っている。

(1978年(第14回)卒、木材加工科)



作品「そのうちにみえしもの」

カツラ、黄銅、蛇紋岩/1,200×1,200×2,100
ヒバ、黄銅、蛇紋岩/1,000×1,000×2,400
ブナ、黄銅、蛇紋岩/1,000×1,000×2,000